

(3) バリアフリーに関する項目

① 主な洋室の出入り口の有効幅員

平均は 766mm で、分布では「750mm 以上 800mm 未満」(49.4%) が 8 年度調査に比べて大幅に増加し、「750mm 以上」のシェアは 70.4%となった。(図 47)。

工法別にみると、平均値に大きな差はない。分布では「750mm 以上 800mm 未満」が全ての工法で最多のシェアを占めており、特にプレハブ工法は 61.1%、在来 RC 造は 60.0%であった(図 48)。

図47 主な洋室の出入り口の有効幅員

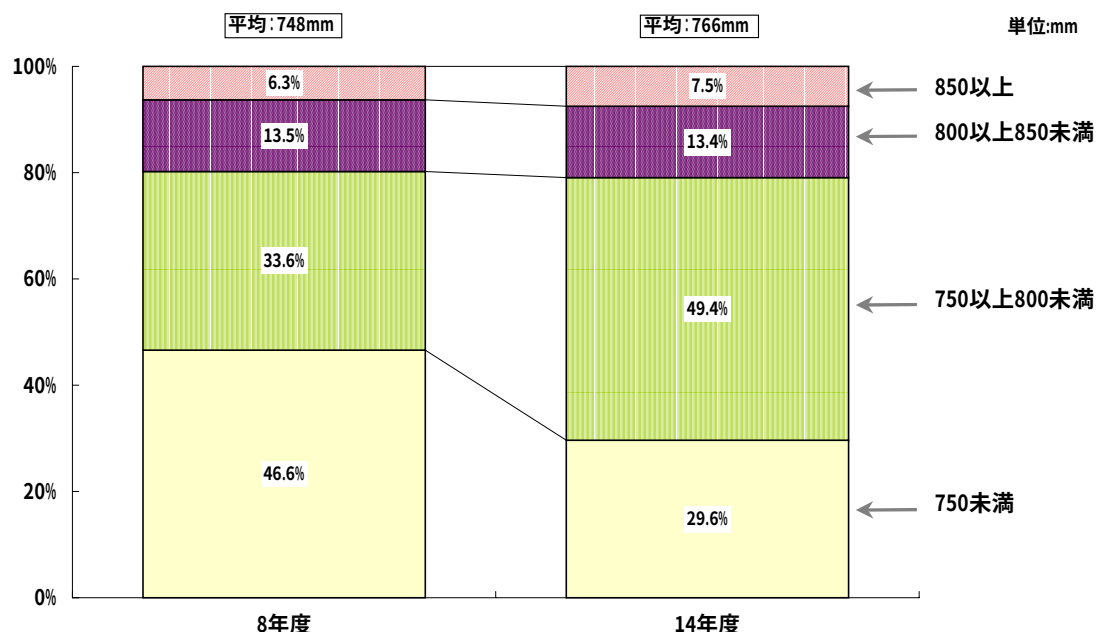
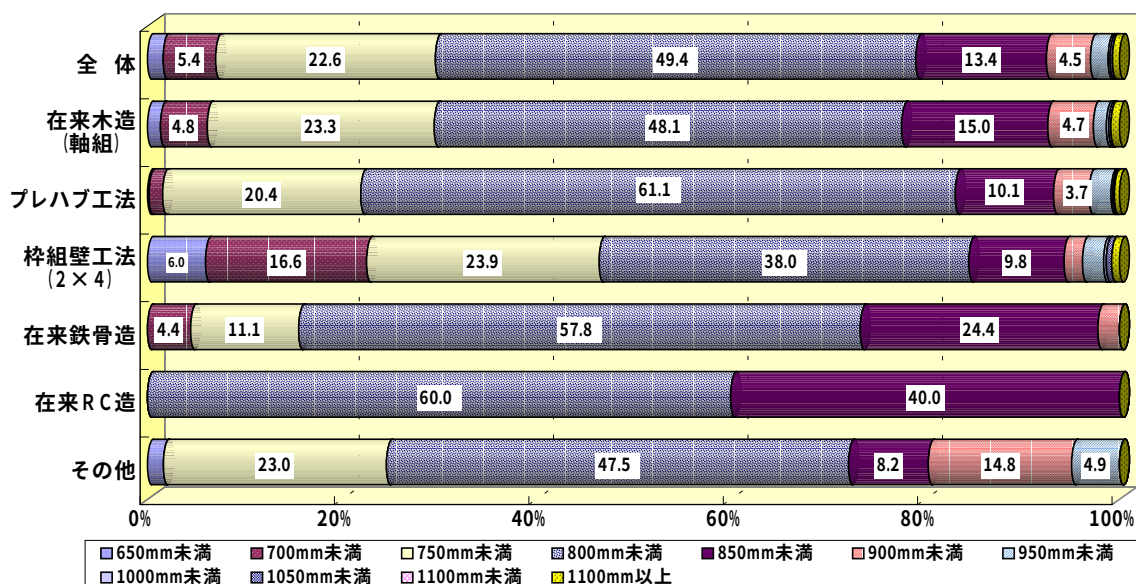


図48 主な洋室の出入り口の有効幅員 (工法別)



②廊下の有効幅員

平均は 853mm で、分布では「780mm 以上 800mm 未満」と「850mm 以上 900mm 未満」が 11 年度調査に比べて増加している (図 49)。

工法別にみると、分布に差があり、在来木造と枠組壁工法は「750mm 以上 800 mm 未満」、プレハブ工法は「800mm 以上 850mm 未満」、在来 RC 造は「950mm 以上 1000mm 未満」がそれぞれ最多のシェアとなっている (図 50)。

図49 廊下の有効幅員

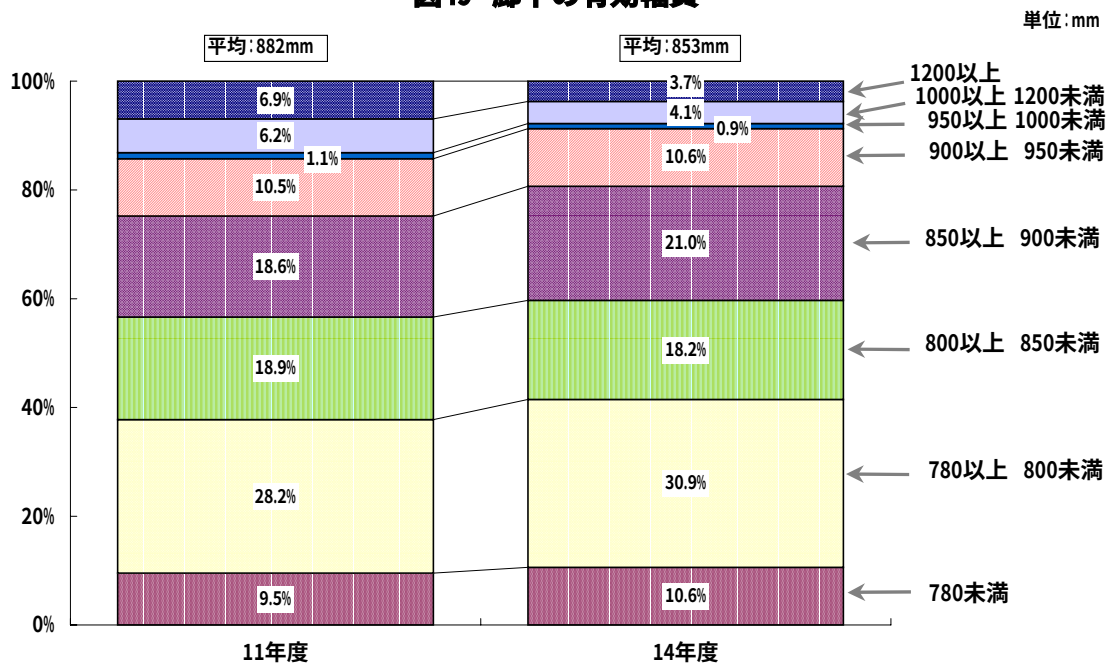
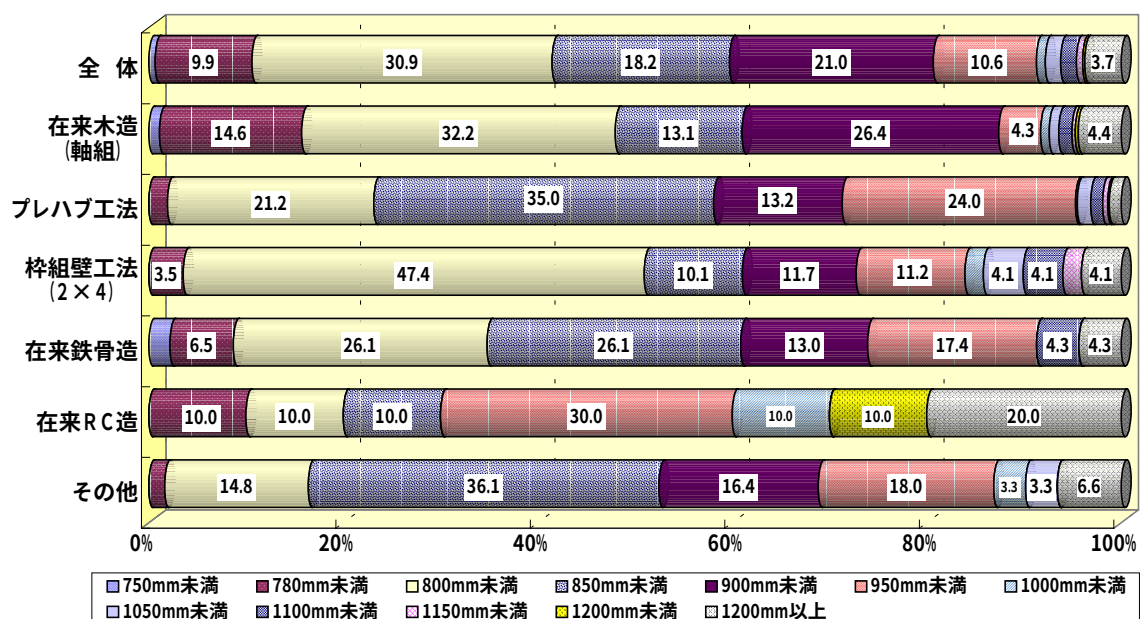


図50 廊下の有効幅員 (工法別)



③階段の有効幅員

平均は 824mm で、分布では「900mm 未満」の割合が増加している (図 51)。

工法別にみると、平均ではほとんど違いはないものの、分布に差がみられ、在来木造は「750mm 以上 800mm 未満」(27.0%)、枠組壁工法は「750mm 以上 800mm 未満」(46.0%)、プレハブ工法は「800mm 以上 850mm 未満」(35.4%)、在来 RC 造は「800mm 以上 850mm 未満」(40.0%) がそれぞれ最多のシェアとなっている (図 52)。

図51 階段の有効幅員

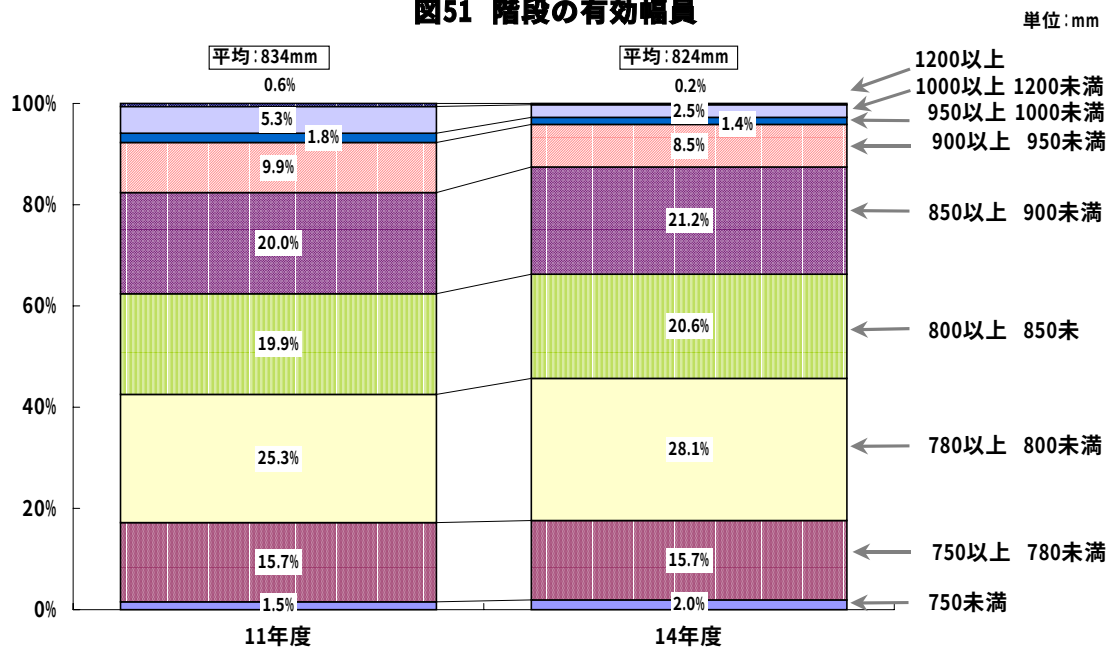
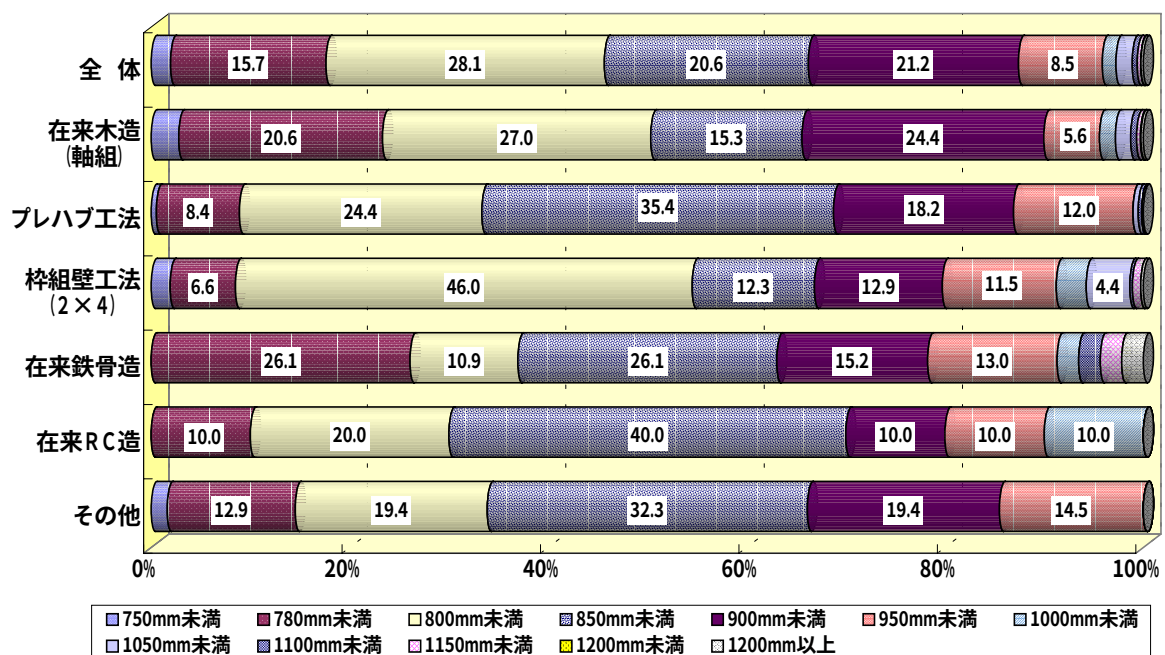
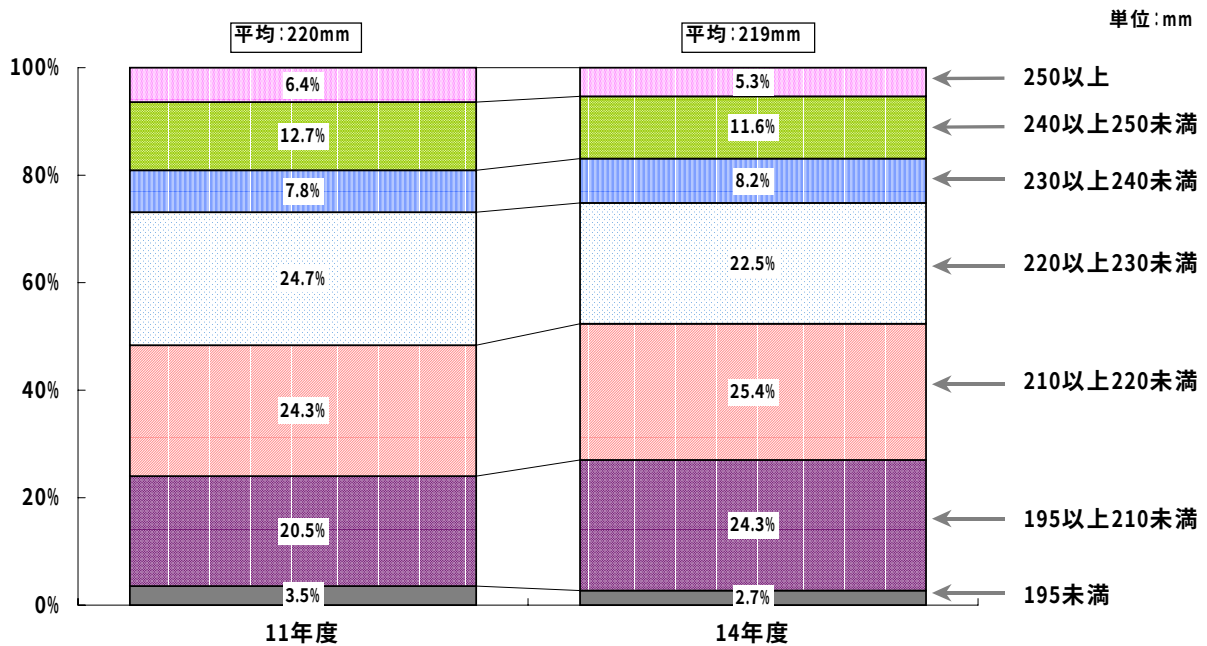


図52 階段の有効幅員 (工法別)



平均は 219mm で、分布では「195mm 以上 220mm 未満」の範囲において 49.7%のシェアを占めており、11 年度調査に比べて増加している (図 53)。

図53 踏面の寸法



工法	170mm未満	180mm未満	190mm未満	200mm未満	210mm未満	220mm未満	230mm未満	240mm未満	250mm未満	250mm以上
全体	0.5	22.5	25.3	22.5	8.2	11.6	5.3	0.0	0.0	0.0
在来木造(軸組)	0.0	12.6	30.0	24.5	8.9	15.5	4.9	0.0	0.0	0.0
プレハブ工法	3.4	52.9	17.7	12.3	4.8	5.0	0.0	0.0	0.0	0.0
枠組壁工法(2x4)	3.0	8.3	25.1	33.4	9.4	11.3	6.9	0.0	0.0	0.0
在来鉄骨造	6.5	13.0	17.4	32.6	8.7	10.9	10.9	0.0	0.0	0.0
在来RC造	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
その他	5.1	28.8	18.6	20.3	10.2	6.8	10.2	0.0	0.0	0.0

⑤けあげの寸法

平均は 200mm で、分布では「190mm 以上 200mm 未満」が大きく増加しており、「190mm 以上 210mm 未満」の範囲において 65.4%のシェアを占めている (図 55)。

工法別にみると、「200mm 以上 210mm 未満」が中心帯となるが、他の工法に比べて、在来木造が若干少なく、他の工法が若干多くなっている (図 56)。

図55 けあげの寸法

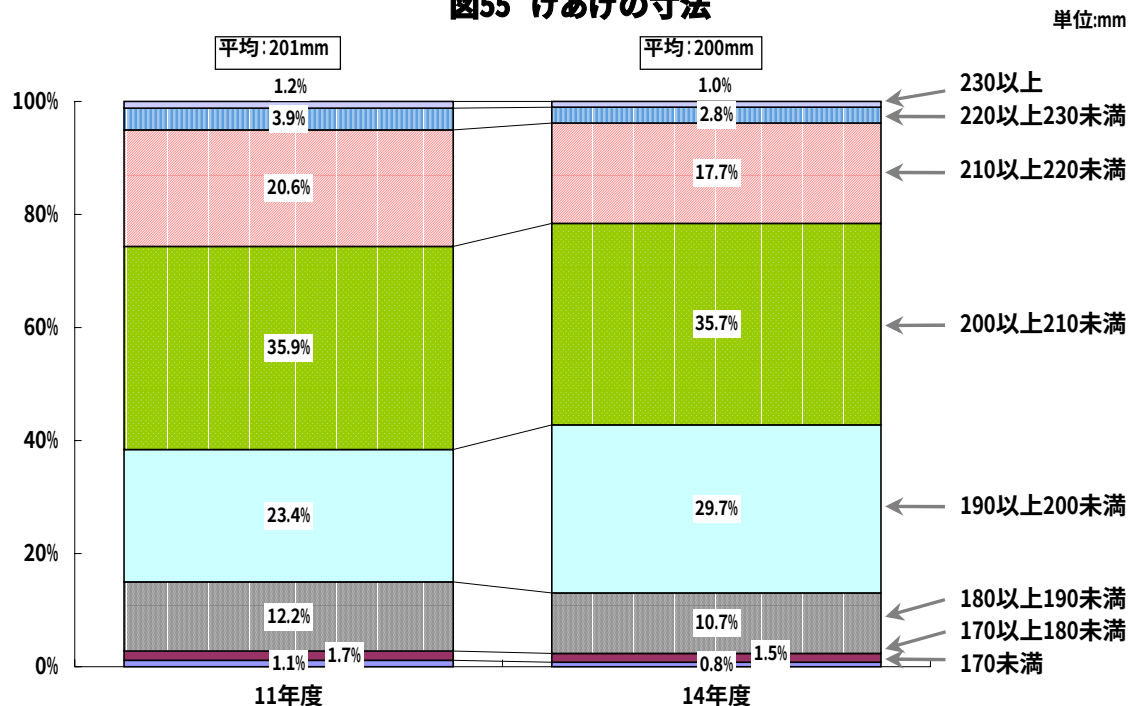
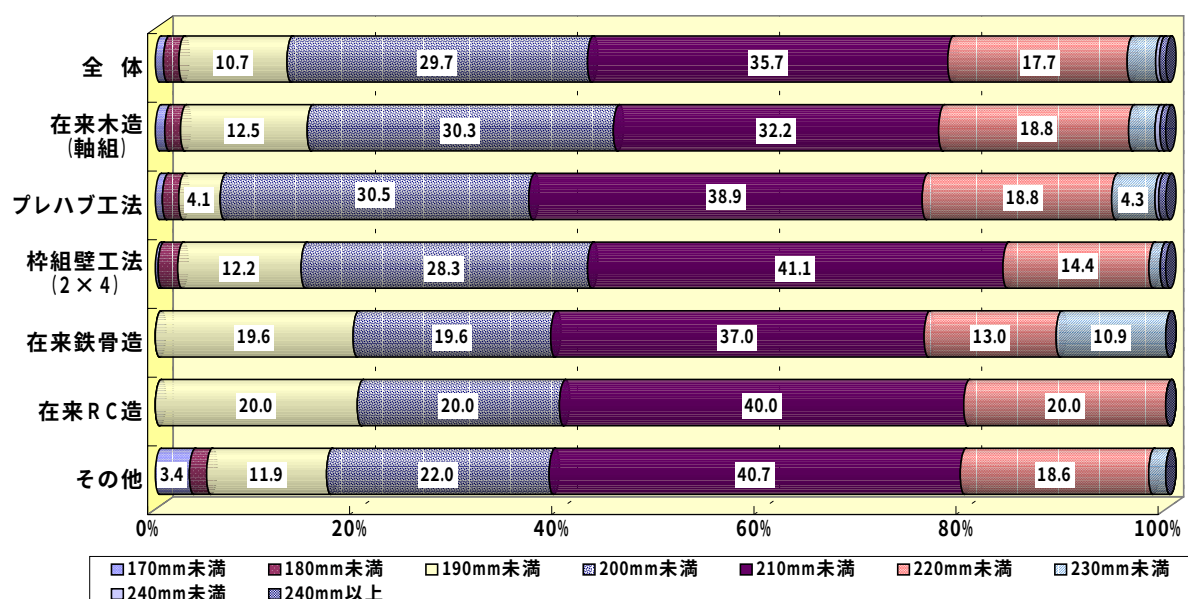
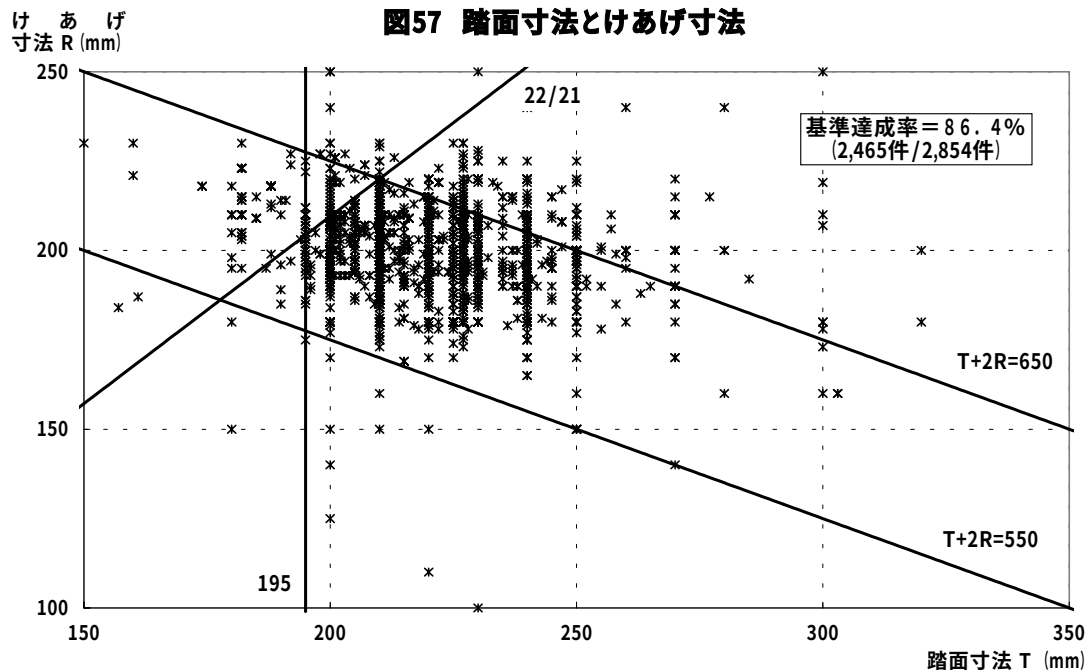


図56 けあげの寸法 (工法別)



(参考)

安全な階段形状の観点から住宅内の階段に設けている基準の達成度合いを確認した結果、達成率は 86.4% (11 年度調査 82.7%) となった。各住宅のポイントをプロットした結果は下図のとおりとなる (図 57)。



基準金利適用基準 (バリアフリータイプ、階段の基準)

(ア) 昇降時に足を踏み外さないために、最低限必要な踏面の確保。

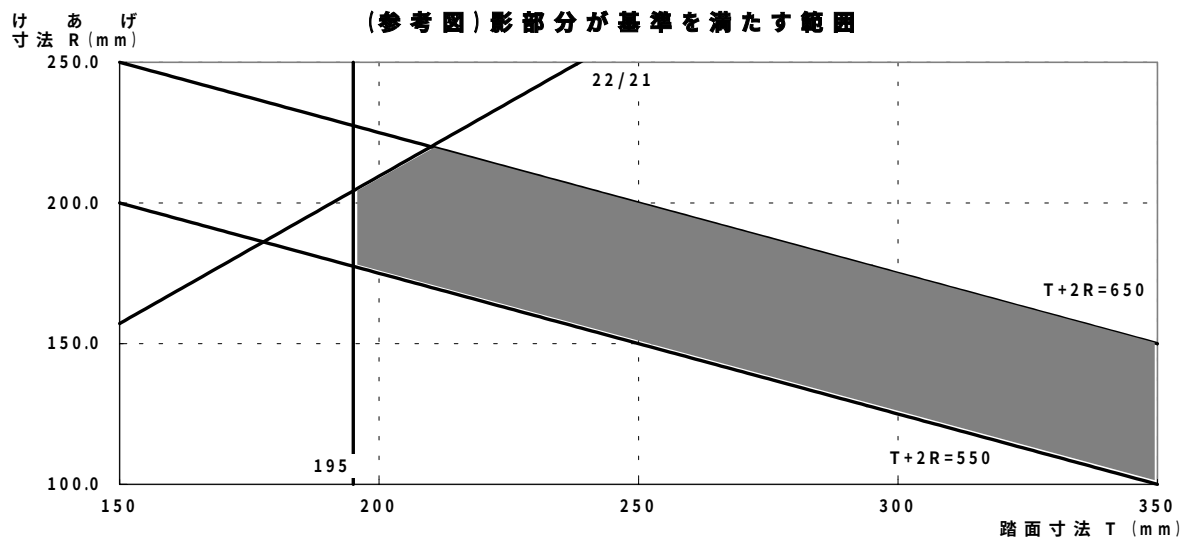
踏面 $\geq 195\text{mm}$

(イ) 勾配を緩くし、昇降を伴う負担を軽減する。

けあげ／踏面 $\leq 22/21$

(ウ) 昇降における歩幅が自然な動作範囲である。

$550\text{mm} \leq \text{踏面} + 2 \times \text{けあげ} \leq 650\text{mm}$



⑥手すりの設置箇所

11年度調査時点と比べて設置率に大きな変化はみられない。手すりを設置する割合は「階段」で91.9%、「浴室」で86.1%に達している。また「便所」は54.9%に増加している(図58)。

工法別には、相対的にプレハブ工法で設置割合が多くなっている(図59)。

図58 手すりの設置率の推移(設置箇所別)

※複数回答

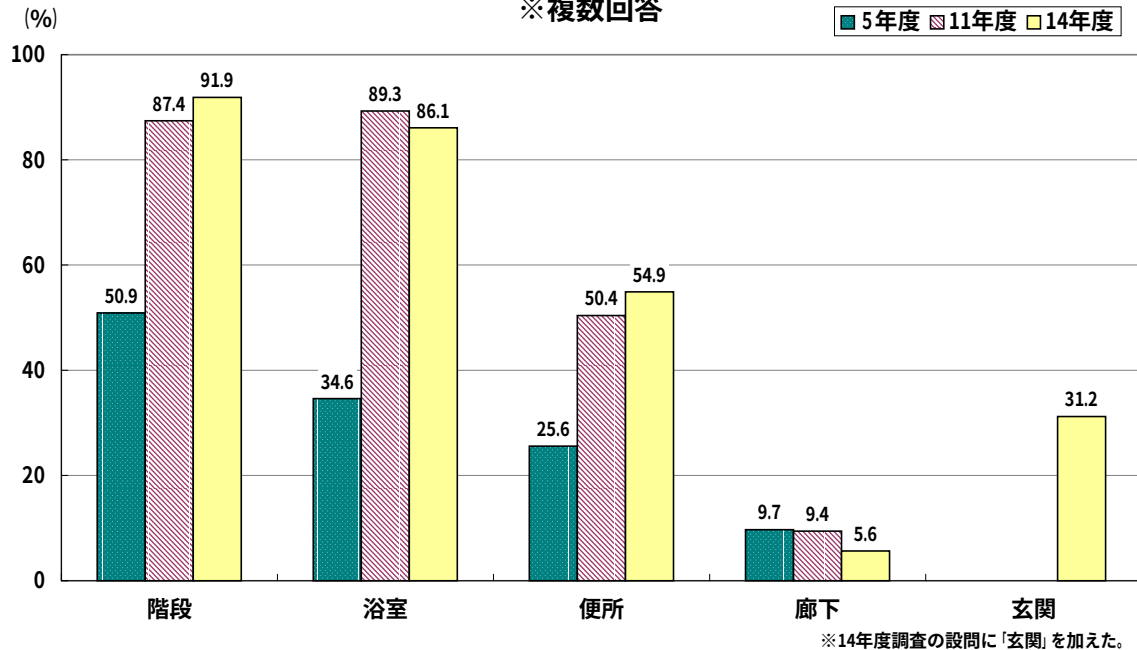
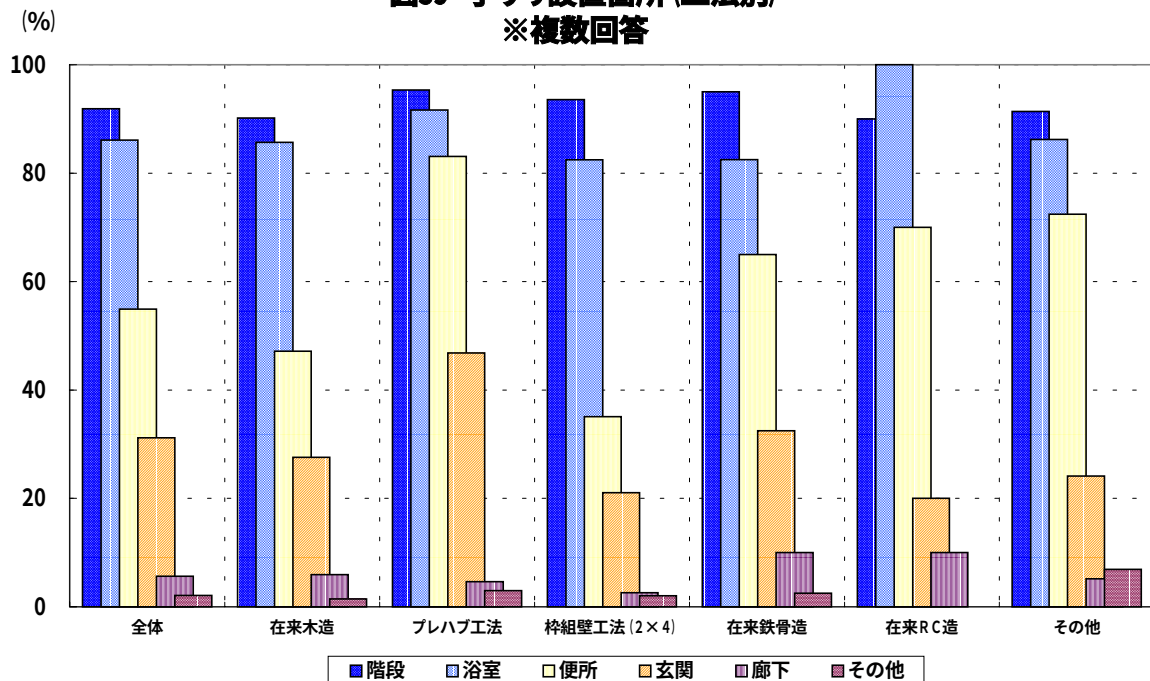


図59 手すり設置箇所(工法別)

※複数回答



⑦ 浴室内の手すり

手すりの設置箇所数は、平均で 2 箇所であった。11 年度調査と比較して「3 箇所以上」設置する割合が増えてものの、依然として「1 箇所」及び「2 箇所」で 8 割近くを占めている (図 60)。

設置箇所は、浴槽に近い①と②の割合が多くなっている。(図 61)。

図60 浴室の手すりの数

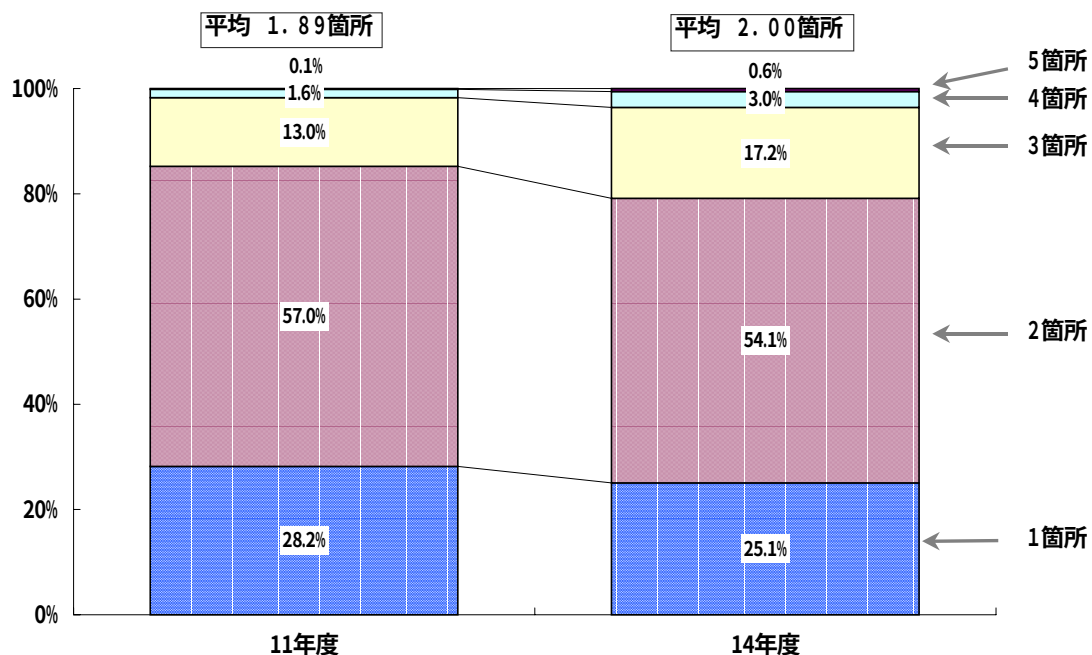
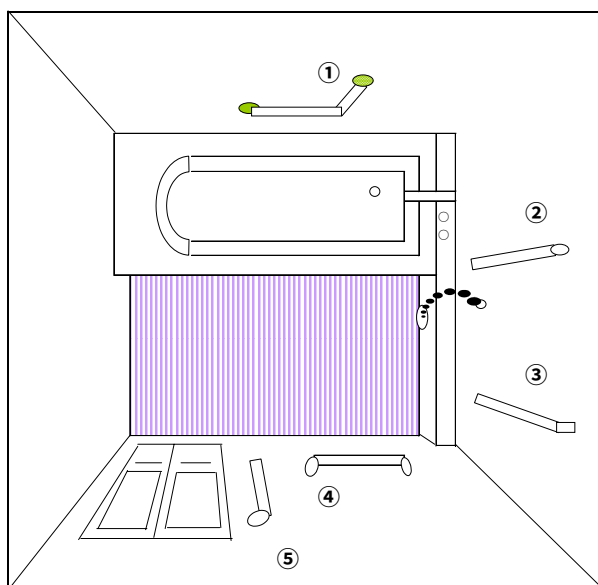


図 61 浴室内の手すり設置箇所の割合



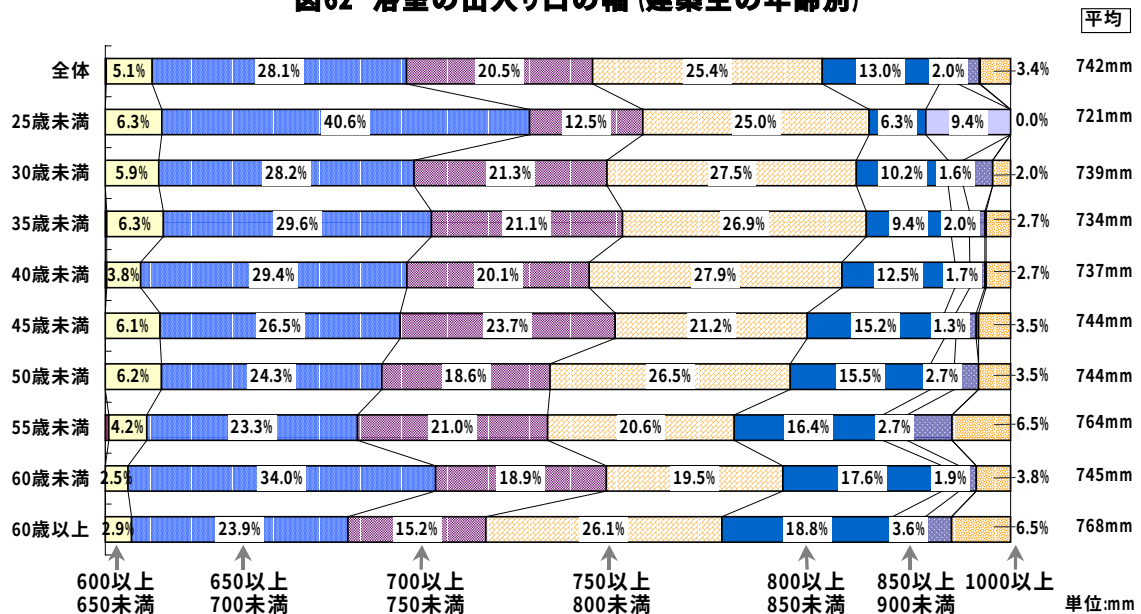
	設置箇所	主要用途	設置割合
①	浴槽の側部壁面	浴槽内の立ち座り、及び姿勢保持	78.7%
②	浴槽縁の延長上の壁面	浴槽またぎ越し時の姿勢安定	68.1%
③	洗い場の壁面	洗い場の立ち座り	2.4%
④	出入口から洗い場までの壁面	浴室内部での移動時の歩行安定	25.0%
⑤	出入口の把手側の側面	浴室出入の際の姿勢保持	25.7%

⑧浴室の出入り口の有効幅員

平均は 742mm で、分布では「650mm 以上 800mm 未満」の範囲において 74%のシェアを占めている。

建築主の年齢別では多少の増減はあるものの、傾向に大きな差はない (図 62)。

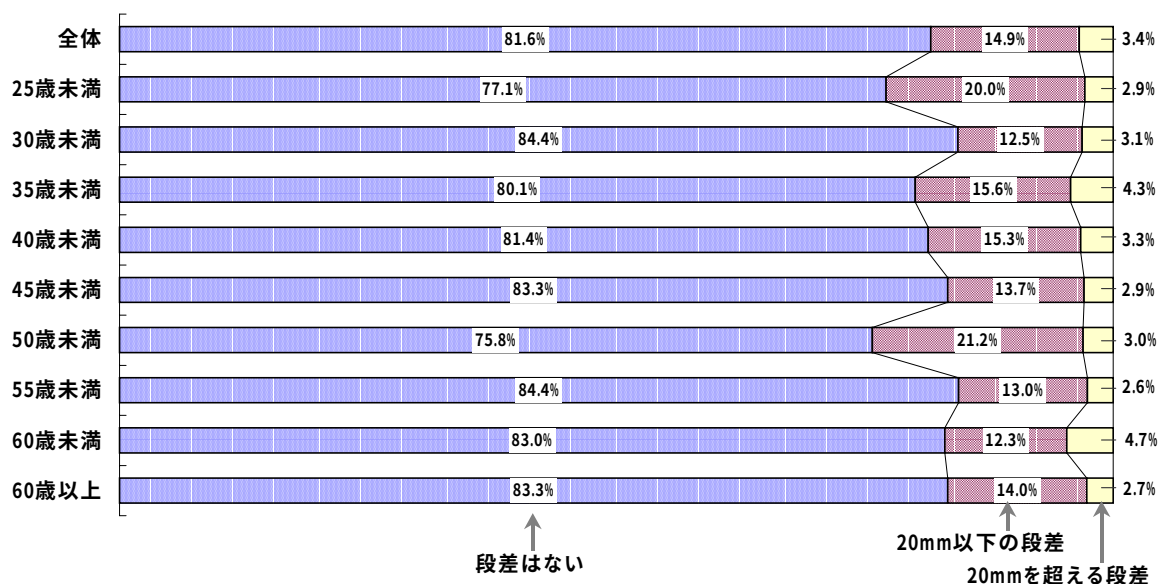
図62 浴室の出入り口の幅 (建築主の年齢別)



⑨浴室の出入り口の段差

「段差はない」と回答した割合は全体で 81.6%に達している。建築主の年齢別では多少の増減はあるものの、大きな差はみられない (図 63)。

図63 浴室の出入り口の段差 (建築主の年齢別)



⑩浴室の有効面積と浴室の短辺の内り

浴室の有効面積は、平均で 3.3 m²、分布では「2.5 m²以上 3.0 m²未満」(58.4%) が最も多い(図 64)。

浴室の短辺の内りは、平均で 1616mm、分布では「1600mm 以上 1700mm 未満」(74.9%) が最も多い(図 65)。

両方とも建築主の年齢別では「60 歳以上」の平均値がやや低くなっている他は多少の増減はあるものの、傾向に大きな差はみられない。

図64 浴室の有効面積 (建築主の年齢別)

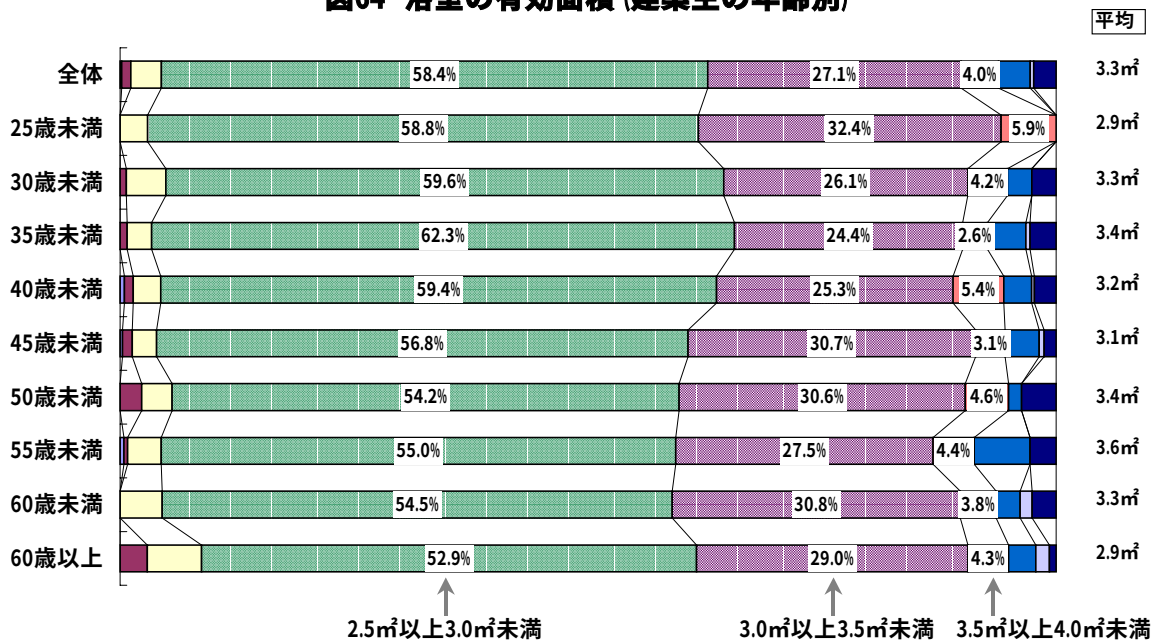
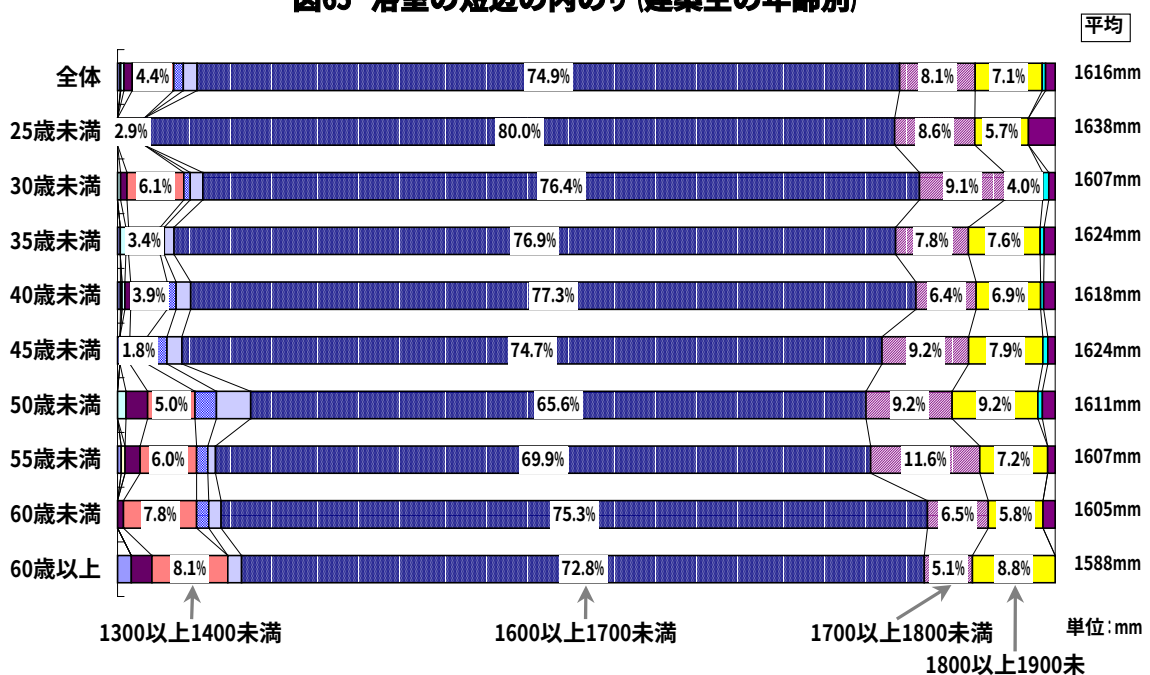


図65 浴室の短辺の内り (建築主の年齢別)



⑪居室、便所、洗面所等と廊下の間の段差の有無

段差が「解消されている」と回答した住宅は 99%であった。

「解消されている」住宅を工法別にみると、プレハブ工法、枠組壁工法、在来 RC 造において 100%であった (図 66)。

浴室の段差との相関では、共に段差がないとした割合は 79.1%であった (図 67)。

図66 段差の解消 (工法別)

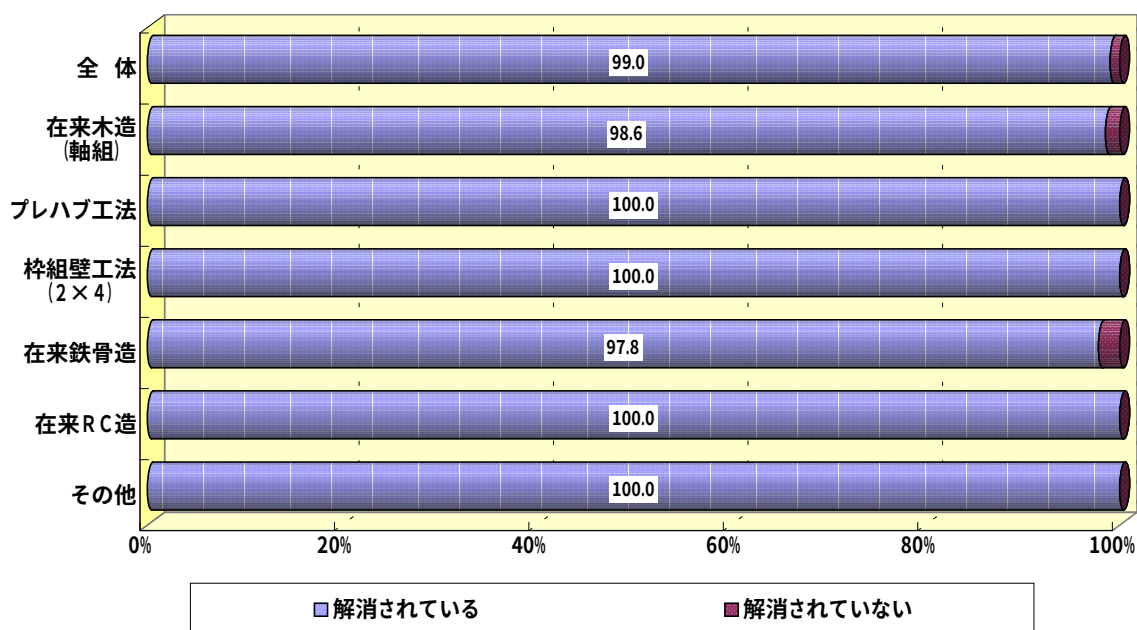
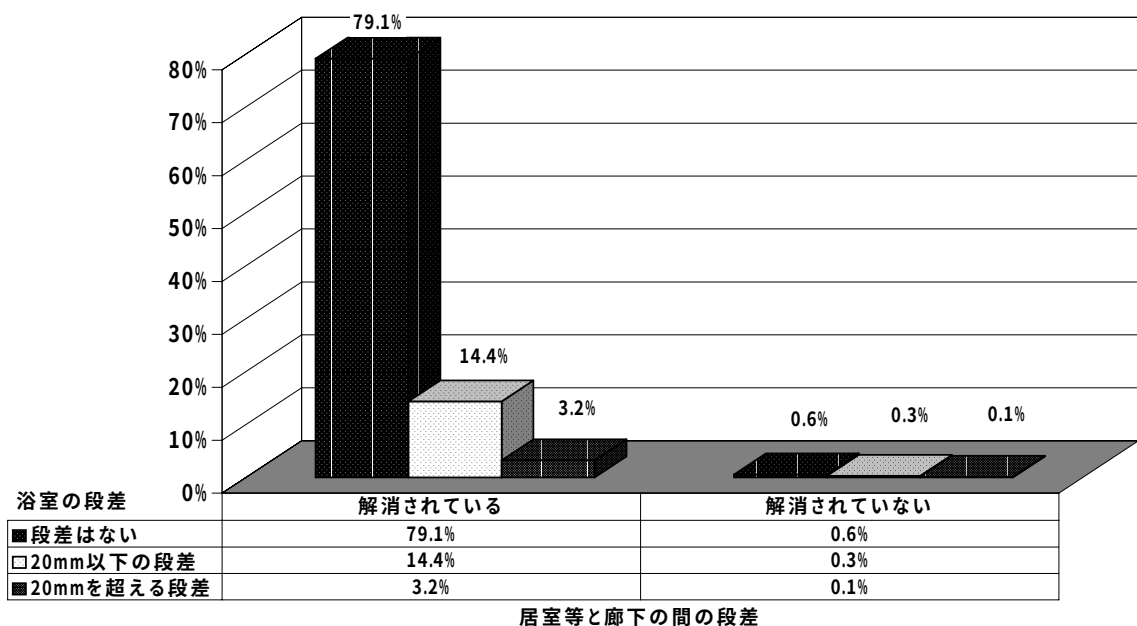


図67 居室等と廊下の間の段差の解消
(浴室の段差の解消との相関)



⑫ 高齢者等の寝室階における便所の有無

高齢者等の有無にかかわらず「寝室階に便所がある」は 91.4%であった。

高齢者等がいる世帯 (664 件) のうち、「高齢者等の寝室のある階に便所がある」は 96.2%であった (図 68)。

「寝室階に便所がある」とした工法別による差はほとんどない。(図 69)。

図68 寝室階の便所の設置 (高齢者の有無別)

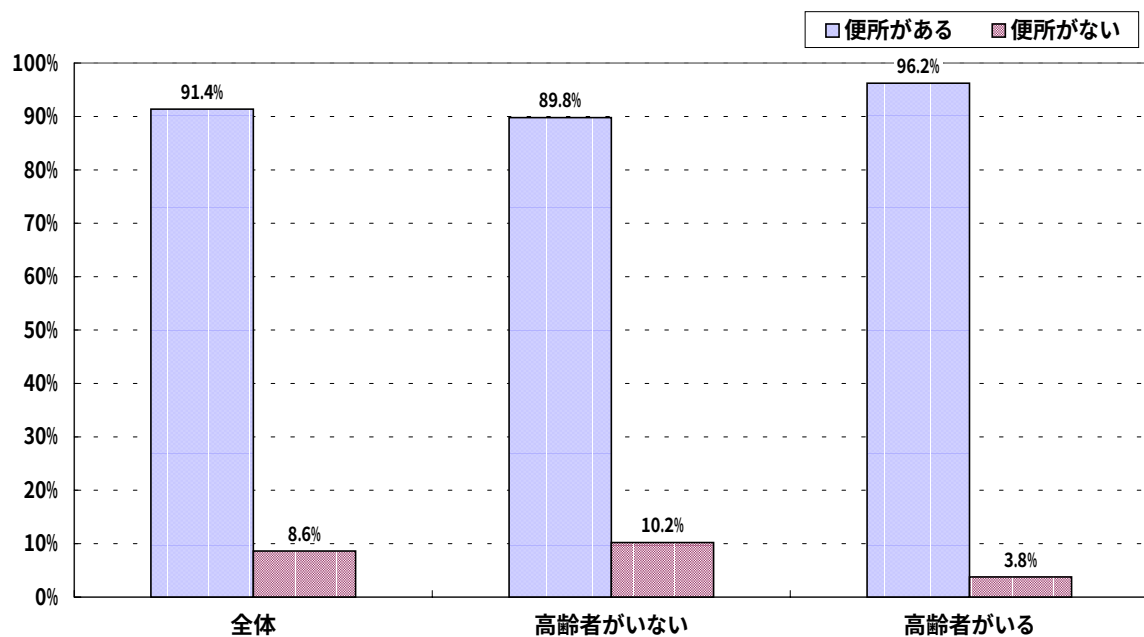


図69 寝室階の便所の設置 (工法別)

